令和８年３月

教育センターだより

令和７年度　第３号　　黒部市教育センター

GIGA スクール新規端末の導入にあたり

黒部市教育委員会事務局
事務局次長・学校教育課長　桐　　義　輝

教育センターだよりに執筆を、と依頼を受け、教職員の皆様が知っているようで知らないのは事務局の仕事だろうと考え、今年度実施した新しい PC 端末への入れ替えに伴い、奮闘した経過を紹介したいと思います。

2019 年 12 月に文部科学省が、創造性を育む教育 ICT 環境の実現に向けてと題するメッセージを公開し、「Society5.0 時代を生きる子ども達にとって、PC 端末は鉛筆やノートと並ぶマストアイテム」であると主張しました。その直後の 2020 年に新型コロナウイルス感染症の拡大に伴って GIGA スクール構想の実施が前倒しとなったことから、令和３年度（2021 年）３月期で全自治体のうち 1,742 自治体（96.1%）が整備済みとなり、小・中学生一人一台教育用端末の整備がほぼ完了となりました。

黒部市も例外ではなく、令和２年度（2020 年）に GIGA スクール端末（Windows OS）を 3,147 台調達し環境構築ののち令和３年度（2021 年）から運用を開始しております。5 年目を迎えた本年度は、バッテリー寿命やストレージ容量のひっ迫、OS のサポート期限終了などの理由から新端末の導入が検討され令和７年度中に 2,892 台を調達し端末の入れ替えを行っていますが、ICT 関連の進化は、まさに日進月歩であり複雑です。単に端末交換を行えばよいというものではありません。

まず、PC 端末の OS 変更（Windows OS → Chrome OS）に伴い、「Google テナント」と呼ばれるクラウド環境を構築するところからスタートしました。特にアカウントを作成する段階で全児童生徒、全教職員の名簿チェック（ふりがな含む）に膨大な時間を要しました。その後、新端末の運用を２学期から開始できるように端末の納品、教職員向けの研修、児童生徒のアカウントラベルの貼付作業（全児童生徒分）を全て夏季休業中に行う必要があり、事前にアカウントラベルを差込印刷（約 2,800 ラベル）しクラスごとに仕分けを行い、貼付作業を行いました。そこでも綿密に作業行程を決めて計画的に各学校へ出向き課員の人海戦術により行っています。その後、充電保管庫のケーブルを端末に合わせて入れ替えたのですが、ほとんどの学校において各教室のブレーカーが落ちる事態となりました。調査した結果、旧端末１台の充電ケーブルの消費電力は 36Wであったものが、新端末は 45Wであり各教室に供給されている電力では賄えないことが発覚します。事由がわかったものの対策案に苦慮している中、充電保管庫の機能を確認すると「輪番タイマー充電」というものがあり、充電時間を各ブロックに分け夜間タイマー設定で分散させることで充電が可能となりました。この設定も各学校で行うため、マニュアル作成他かなりの時間と労力が必要でした。

同時作業として、教職員のメールサービス@tym.ed.jp（富山県総合教育センター発行）の市町村への提供終了への対応も迫られ、教職員に付与する Google アカウントを利用し、メールができるよう整備しております。

これらの作業は、資格業務でない限り事務職員で作業することが基本となります。学校教育課業務の一部分を紹介させていただきましたが、今後も学校管理担当として子ども達が、より快適な学校生活を送れるよう「縁の下の力持ち」でありたいと思います。

《教育センター研修会での学び》

【学級経営研修会】１月９日（金）

〔学校教育課　若島　肇　班長による講話〕

・若島班長の「子供の思いを軽んじるな」という言葉が印象的でした。子供の声を拾い上げるだけではなく、どのような思いをもって伝えているのか、子供が納得する応えができるように心がけたいと思います。
・自分が今年度経験したことを重ねながら若島班長のお話を聞きました。新たな環境で、これまでで１番悩むことの多い１年でしたが、「ピンチはチャンス」とポジティブに捉え、来年度も頑張りたいと思います。また、まだ私には子供を信じて任せることができないなと振り返りました。愛をもって目の前の子供たちに接していきたいです。

【情報教育研究委員会】２月４日（水）

〔情報チェックシートの結果の考察や、ＩＣＴ機器を活用した授業実践の共有〕

・情報モラルに関する動画の視聴を毎月促しているため、その意識は高まっているように思う。しかし、大人がいないところでもそのモラルが通用できるようにしなければならないと思う。また、担任や教科担任によって、タブレット使用率に差があると思う。
・学校ごとの取り組み状況や効率化のアイデアなど、頻繁に話して情報共有していかないと黒部市全体のタブレット活用や情報活用能力の育成は進まないと考えます。

【生徒指導主事等研修会 兼 いじめ問題等研修会】２月 12 日（木）

〔富山県警察本部傍受係　住和慎一郎　係長による初期聴取の在り方に関する講習〕

・事細かく繰り返し聞くことは避ける、質問が誘導になっていないかよく考えるなど、聴取の仕方に新たな気付きがあった。
・子供の発言だけでなく、聴取者の発言を記録することについて意識が薄かったので心がけたい。
・聴取において、日々の面談でも必要な手法だと感じました。状況に応じて、教頭としての指示の出し方についても注意していきたいと思いました。
・教育相談と聴取は違うところも大きいとは思いますが、目的に応じて質問を使い分ける必要があると感じました。

〔東部教育事務所指導課 轡田真理 主任生活指導主事によるいじめ対応に関する講話〕

・R６年度のデータを基に強みや弱み、富山県の傾向を知ることができた。教員のアンテナをいじめに関してはさらに高くしていきたい。
・いじめの校内研修はなかなか時間を取ることができないが、今回、ワークシートを使って実際にやってみると、気負わずできるのではないかと思った。
・教職員全体として、いじめは絶対に許さない、という毅然とした対応を取りながらも、強い叱責に頼らない発達支持的な生徒指導ができるように、校内研修の開催やチームとしての指導対応ができる体制を築いていきたいです。

今年度も、研修会に多くの先生方にご参加いただき、ありがとうございました。
次年度も、先生方のお力になれるような研修会を実施していきます。

令和７年度令和のとやま型教育推進事業　成果と課題〔ダイジェスト〕

【黒部市立荻生小学校】

１　研究課題

「思い」をもち、主体的・対話的に探究する子供の育成

視点１　ねらいを明確にした授業の構想

視点２　子供が自己調整しながら学習を進めることができる学習過程の工夫

視点３　子供の学びを見取り、指導に生かす評価の工夫

２　取組の概要

(1) 具体的な取組

研究課題の解明に向け、富山大学大学院教職実践開発研究科の増田美奈准教授を迎え、１年間、研究を進めてきた。

①　課題の把握及び方向性の確認

講師の増田准教授に、本校の全学級の授業を参観（７月）していただき、各学級の実態と各教員が力を入れている視点や悩みを明らかにした。今後の研修の方向性や課題に対する認識を共有する貴重な機会となった。

②　公開授業

７月の要請訪問で明らかになった課題の解明と本校の目指す子供の姿である「や（やさしく）か（かしこく）た（たくましく）」の育成を意識し、下学年部会では特別の教科道徳、上学年部会では算数科の提案授業を 10 月に実践し、希望する市内の教員に向けて公開した。

＜下学年部会＞

授業者：第２学年　　竹田梨那　教諭
特別の教科　道徳
主題名：ひとりひとりを大切に
題材名：のこぎり山の　大仏

＜上学年部会＞

授業者：第５学年　　松島圭吾　教諭
算数科
単元名：分数のたし算ひき算を広げよう

(2) 成果

・子供が学習に対する思いをもてるよう学習課題の提示の工夫や発達段階に応じた表現方法の工夫等を行うことで、主体的な学びや対話的な学びを促すことに繋がった。

・子供同士の思いを繋げたり、共有したりする発問や活動を意図的に取り入れることで、学びの本質に迫ったり、学びを深めたりすることができた。

・振り返りの時間を保障・充実させることで、学習内容の定着だけでなく学び方も振り返ることができ、次時以降の主体的な学びへと繋げることができた。

(3) 課題

・自己調整しながら学びを深めるためには、場面ごとの支援にとどまらず、１時間や単元全体で何を学び、どのように学んでいくのかを想定し、支援を行う必要がある。発達段階に応じて子供主体の授業を日々積み重ねることが重要である。

内地留学報告

「おかえり！」を支えるチーム学校の力
― ３か月の内地留学で学んだ、学校と児童福祉施設との連携のヒント ―

黒部市立明峰中学校 教諭 笹島 裕子

１ 先生、こんな「もどかしさ」を感じたことはありませんか？

私は、児童福祉施設への入所・退所を経験する子供たちと接する中で、子供たちの学習の遅れや友人関係の悩み等、困難を抱える子供たちを前に「教師として何ができるのか」と自問自答し、手探りの支援に確信がもてないこともありました。

3か月の内地留学では、富山大学での研究や施設への聞き取り調査を通して、「学校と施設がどうつながれば、子供が安心して過ごせるのか」をじっくりと考える機会をいただきました。

２ 「退所連絡が急にきた！」そのとき、学校ができること

施設の退所が決まるのは、時には直前になることもあります。関係機関から「明日から登校します」と言われて慌てないために、組織として準備しておきたいポイントは３つです。

(1) 「いつでも帰っておいで」の体制づくり

子供が学校に戻ってきたその瞬間から、自分の居場所があると感じられる準備を整えます。机や教材などの物理的な備えはもちろん、教員間の情報共有を密にし、「いつでも温かく迎え入れる土壌」を育んでおくことが重要です。

(2) プライバシーを守る「説明の工夫」

他の子供たちへの伝え方は、必ず本人・保護者と相談して決めます。例えば、「家族の仕事の都合で離れていたけれど、用事が済んだから戻ってきたよ」 等といった、本人が負担を感じない共通の「ストーリー」を用意しておくことが大切です。

(3) 「担任一人」に抱え込ませない

担任個人の判断ではなく、学校全体の統一した方針として対応することが、子供と教員双方の安心につながります。

３ 「つながり」を絶やさない支援の充実

教員は施設入所中の子供と面会が可能です。定期的な訪問による教材の提供や、施設での学習成果・作品の回収を行い、それらを最大限評価に反映させることが求められます。加えて、施設の ICT 環境を活用したオンライン学習や交流も積極的に取り入れる必要があります。こうした継続的な関わりの中で、学校やクラスの様子を直接伝えることが、本人の復帰への不安を和らげる大きな支えとなります。

今回の研修で得た知見について、もっと詳しく知りたいという方がいらっしゃれば、いつでも声を掛けてください。子供たちにとって学校が「安心して過ごせる居場所」になるよう、皆さんと一緒に尽力していきたいと考えています。

また、内地留学の報告書は右の2次元コードからアクセスすればご覧になれますので、必要に応じてご活用ください。

「学校不適応の生徒へのチーム学校としての効果的な関わり方」

黒部市立明峰中学校　教諭　　小川　晶

４月から９月までの６か月間、富山大学教育学部 石津憲一郎教授の指導の下、講義や演習を受講するとともに、研究者が積み重ねてきた研究成果に触れ、新たな知見を得る貴重な機会を得た。本内地留学では、学校不適応を示す生徒に対し、学校としてどのように効果的に関わることができるのかについて、教員への無記名アンケート調査および県内のカウンセリング指導員へのインタビュー調査を実施し、考察を行った。その結果、一定水準の援助サービスを提供するためには、次の２点が重要であると考える。

・担任だけでなく、全ての教員が支援に関わることができる校内教育相談体制の整備

・「チーム学校」が風通しのよい教員集団であること

これらを実現するための具体策を以下に示す。

【担任だけでなく、すべての教員が支援に関わることができる校内教育相談体制の整備について】

１．欠席が続いた生徒への対応マニュアルの作成

欠席が続く生徒への対応は担任の裁量に委ねられがちで、経験差による支援のばらつきが課題である。そこで初期対応マニュアルを整備し、支援の質の均一化と全教員の関与を促すことが重要である。F 中学校の実践を参考に、初日連絡、３日目家庭訪問、安心を重視した面談、情報共有とチーム対応を基本とし、状況に応じた配慮も行う。

２．個別の援助チームの形成

欠席が続く生徒に対しては、担任に限定せず、安心感を与えられる教員であれば誰でも関われる体制を整備することが重要である。個別援助チームを基盤に連携し、学年主任や生徒指導主事等が SC・SSW を積極的に活用することで、教員の時間的・心理的負担を軽減し、より円滑で充実した支援につなげることができる。

３．相談室の活用に関する共通理解

調査結果を踏まえ、相談室利用生徒への支援において共通理解すべき事項は４点である。第１に、生徒の目標を定期的に確認し、その選択を尊重すること。第２に、「できること」を増やし、自己決定を支えること。第３に、担任や教科担当など多様な教員がチームで関わり、相談室を次のステップへの場として位置付けること。第４に、教員間で情報共有を徹底し、関わり方の一定化を図ることである。

【「チーム学校」が風通しのよい教員集団であること】

１．エンカウンターやアイスブレイク研修の実施

学期初めの人間関係づくり研修は生徒向けに実施されることが多いが、教員同士で行うことも有効である。事前に実施することで教員間の信頼関係が深まり、多様な立場の教員がつながり合い、相互理解を図る土台が形成される。それは生徒支援の充実にも直結する。

２．「共に支援する」姿勢の共有

互いの立場を尊重し、それぞれの視点から必要な支援を共に行う姿勢が求められる。負担が偏らないよう配慮しながら連携し、日頃から気軽に相談できる関係性を築くことが重要である。カウンセリング指導員は雰囲気づくりに努め、誰に対しても平等に声を掛ける姿勢を大切にする必要がある。

【まとめ】

悩みを一人で抱える教員は少なくない。だからこそ互いに支え手となる意識をもち、協力し合う姿勢が重要である。困難を抱える生徒が誰でも安心して支援を受けられるよう、機能的で安定した支援体制の構築を目指す必要がある。

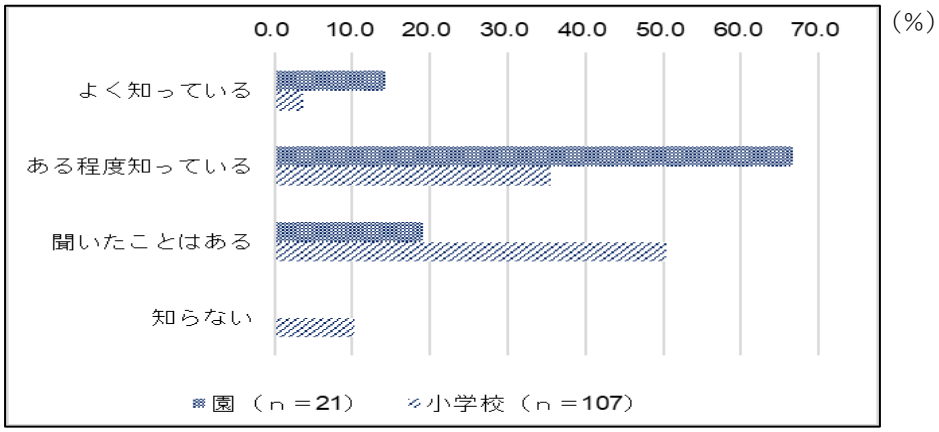
安心できる小学校生活への適応について～幼保小接続の視点から～

黒部市立中央小学校　教諭　池亀 未央

10月から3か月間、富山大学教育学部において、和田充紀先生のご指導のもと、研修する機会を与えていただきました。和田先生をはじめ、他の内地留学生や教職大学院の先生方の協力のもと、幼稚園や保育所、こども園等の幼児教育施設や小学校の先生方へのアンケートを実施し、幼保小接続についての実態や先生方の思いを知ることができました。

（1）幼保小架け橋プログラムの認知度について

幼保小架け橋プログラムについて「よく知っている」「ある程度知っている」と回答した割合が、園職員は約 80%であったのに対し、小学校教員は約 40%でした。また「聞いたことはある」と回答した小学校教員は約 50%でした。このことから、幼保小プログラムは、園職員には認知されている割合が高いものの、小学校教員の認知度は園職員より低く、認知度に差があることが示されました。



【幼保小架け橋プログラムの認知度について】

（2）今後の課題や悩み、要望等について

園の先生方に自由記述により回答を求めたところ、今後の課題や悩み、要望として、次の 4 点があげられました。

①「お互いの考え方を知れたらいい」「小学校の先生方との話し合いの場がなかなかもてない」などの<教職員間の交流>（4名）、②「幼保小接続のためのロードマップなどの周知がされていない」「小学校からのアプローチがもっとあればよい」などの<幼保小の連携>（3名）、③「交流内容が幼児には少し難しい」「交流内容についての打合せ等の時間の確保が難しい」などの<交流における打ち合わせの時間の確保>（2名）、④「園の教育活動の内容を学校と共有したい」「幼児の育ちを実際に見て、小学校の生活や授業に活かして欲しい」などの<園での育ちの理解>（2名）です。

文部科学省が公表した「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き（初版）」では、学びの連続性の確保について、「園との円滑な接続により、小学校での学びや生活が充実するよう、架け橋期のカリキュラムを工夫することが大切である。」と記されています。

私自身、これまで何度か1年生担任をしてきましたが、「1年生だからできない」という勝手なイメージで、子供に接していたと反省しました。「幼保小の架け橋プログラム」の実施により、0～18 歳までに育成すべき資質・能力を見通し、学びの連続性に配慮してカリキュラムを考えることが大切だと学びました。そのために、幼児期のアプローチカリキュラムと小学校1年生のスタートカリキュラムを一体的に捉え、幼保小の教職員が連携して架け橋期のカリキュラムを作成していくことが大切だと思いました。

黒部市教育支援センター　ほっとスペース「あゆみ」より

・・・・・ほっとスペース「あゆみ」日記　　２月１８日（水）・・・・・

ゲストティーチャーとしてスタディ＆スポーツ TOYAMA の佐渡雄太さんをお招きしました。今回は保護者も一緒に参加して、エンジョイリレー、タグ取りゲーム、ベースボールゲームなど、様々な活動を行い、楽しい時間を過ごしました。

〔参加した児童生徒の感想〕
- エンジョイリレーが楽しかった。
- 鬼ごっこは最後までつかまらなかったので、よかった。エンジョイリレーは負けたり勝ったりして面白かった。１番楽しかったのはベースボールゲームだった。
- タグ取りゲームが楽しかった。
- 鬼ごっこが楽しかった。
- ベースボールゲームは悔いが残ったけど、力いっぱいボールをかっ飛ばすのが面白かった。

〔参加した保護者の感想〕
- タグ取りゲームは難しかったけど、面白かったです。

ほっとスペース「あゆみ」の活動にご協力いただき、ありがとうございました。次年度も、通所している児童生徒について、連携して支援していきたいと思います。よろしくお願いします。

教えて！ＣＳ専門員さん

一年間を振り返って

黒部市教育委員会コミュニティ・スクール専門員
茶　谷　　渉

４月よりコミュニティ・スクール専門員として着任しました。各校の活動や学校運営協議会に参加し、学校と保護者・地域の皆様が子供たちのために積み重ねている活動の素晴らしさを改めて感じるとともに敬意を表します。

学校が誕生して 150 年以上経過しますが、それ以降、保護者や地域の皆様には、子供たちの成長のために絶大な協力をいただいていることと思いを馳せます。近年の地教行法の改正に伴い、コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）が施行され、黒部市では令和６年４月から、よりよい教育（学校運営の改善・児童生徒の健全育成）を目指し、各校に学校運営協議会が設置されました。コミュニティ・スクールへと形を変えたものの学校や保護者・地域の皆様の子供たちへの熱い思いは、今も昔も変わっていないはずです。そして今後、社会状況が変化しても、昔から引き継がれる「子供たちのために」という思いは変わらないと信じています。

この一年間、コミュニティ・スクールの根幹であると思われる人と人とのつながりの大切さを強く感じました。かつての教え子や保護者、地域の皆様、同僚等が、それぞれの立場で活躍する姿にふれ、感動を覚えるとともに感謝の念をもちます。これまでの「ご縁」を噛みしめるとともに、今後どんな「ご縁」ができるか楽しみでもあります。

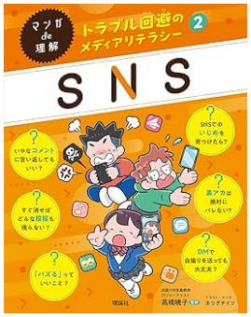
これまでのコミュニティ・スクールの取組に対するご支援・ご協力に感謝するとともに、今後も子供たちのよりよい成長のために、微力ではありますが努めたいと思います。

黒部市教育センターからのお知らせ

★新着図書！　4月より貸し出します

〇非認知能力育成に関する書籍

〇今日的な課題に関する書籍



★学校間共有フォルダ！

🗀学校間共有＞🗀黒部市教育センター＞🗀各種フォルダ

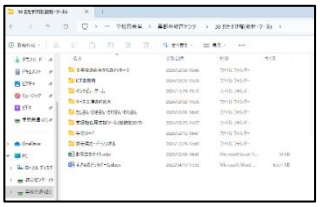
〇研修会資料

市教セ主催の研修会の資料が保存されており、フォルダを通じて資料を配付することがあります。校内研修にも活用していただけます。

〇書類の提出や日程調整のためのカレンダー

フォルダを通じてセンターに書類を提出していただくことがあります。吉田科学館のプラネタリウム学習の日程調整のためのカレンダーもあります。

〇黒部市教育支援センターほっとスペース「あゆみ」の資料



運営要領や通所願い等、必要な書類が保存されています。運営要領には、通所までの流れが記載されています。

〇おたすけ箱

先生方が、0（ゼロ）から教材を手作りしなくてもいいように「使えるものはみんなで共有しよう！」ということで、フォルダ「おたすけ箱」があります。是非、覗いてみてください。

その他、他市町村を含めたいろいろな学校の指導案、各種検査、ボードゲーム等、いろいろな資料が教育センターにあります。お気軽にお尋ねください。